

ザ・ビートルズとラジオ深夜放送

—1960年代の中部日本放送を事例として—

長谷川 倫子

はじめに

本研究は、1960年代後半の中部地区で、圧倒的な人気を誇った中部日本放送の深夜放送番組でオンエアされたザ・ビートルズ (The Beatles) の楽曲を手がかりに、1960年代の日本におけるザ・ビートルズとラジオ放送について考察することを意図している。

1960年代の英国に彗星のごとく出現したザ・ビートルズはその斬新な楽曲とパフォーマンスで世界中のティーン・エイジャーを魅了した。そのファン層はその音楽とともに青春時代を過ごした世代に留まらず、その後も年齢や文化の壁を超えてファンを獲得し、レコードデビュー50年を経てもなお、ザ・ビートルズの人気は何ら衰えを見せない。

2012年の8月に開催されたロンドン・オリンピックの開会式においても、メンバーのひとりであるポール・マッカートニー (Sir. Paul McCartney) が登場し、楽曲「ヘイジュード (Hey Jude)」を披露したが、これはザ・ビートルズが大英帝国にとって世界に誇る偉大な音楽家であることを示すものであった。これはまた、1962年にレコードデビューを果たしたビートルズが、50年という歳月を経てもなお、世界の音楽産業の頂点に君臨していることの証でもある。

ザ・ビートルズが彼らの手によるオリジナル作品で構成されているアルバムやシングルレコードを次々と世に送り出したのは、1962年9月11日 (レコーディング) から1970年5月までのわずか8年未満に過ぎない間であったが、その彼らの楽曲はその後愛好され続けている。例えば、ネットを通じた楽曲の購入を可能とし21世紀の音楽視聴行動を大きく変えたアップル社が2010年7月からザ・ビートルズの13枚のアルバムの楽曲をiTunesストアのリストに加えたところ、ダウンロードが相次ぎ、彼たちの楽曲は瞬く間にチャートを駆け上り驚異的な売上高を示す数値をたたき出した¹⁾。レコード盤、カセット・テープ、CD、MD、iTuneと音楽再生装置は技術革新の恩恵により日々進化を遂げている。このように、音楽体験を可能にするメディア環境におけるめまぐるしい変化の波をものとせず、発表時から一貫して絶大な支持を得てきたザ・ビートルズの楽曲は、今日ではロック・クラシックという区分けの中に入れられている。

ザ・ビートルズは、1960年8月に英国のリバプールで、四人の若者によって結成された。

ザ・ビートルズとラジオ深夜放送

アメリカでロックという新しいスタイルの音楽が産声を上げたのは1950年代の中旬であるとされている²⁾。ロック音楽は第二次世界大戦後、トランジスタラジオや白黒テレビ、レコード・プレーヤーなどの音楽の再生装置が各家庭に普及し、限られた特権階級に所属するもののみが音楽を楽しめた宮廷内サロン文化の時代や、その場に居合わせた聴衆のみ音楽鑑賞がなかったミュージック・ホールの時代とは異なり、居住地域や身分といった社会的・物理的な制約を超えて、誰にでも音楽を体験できることを可能にした19世紀末からの技術革新の恩恵による音楽革命の延長線上に位置している。楽器演奏や歌唱が複製音楽としてパッケージ化された製品となり、商業ベースに乗った楽曲はその流通販路を通じてより広範の呼びこみにも送り届けられ、音楽へのアクセシビリティ拡大が著しく進むのは、第二次世界大戦後である。まさに、ビートルズ音楽の世界制覇には、そのようなビジネスモデルを創出したメディア環境が大きく寄与している。アメリカが豊かさを享受し、その繁栄が羨望的となった1950年代から1960年代にかけて、アメリカ国内のヒットチャートに登場した軽快な楽曲の数々が、世界中に販売網を持つレコード会社の拡大路線によって流布され、アメリカのポピュラー音楽の海外進出に拍車をかけた。

戦後のアメリカのポピュラー音楽は、英国でも若者の心を捉えていた。イギリスでは、駐留するアメリカ兵向けのドイツのキャンプベース発のラジオ番組の受信が可能だったこともあり、アメリカの若者たちと同じラジオ共同体にイギリスに住む人たちも加わることが出来たし、公共放送であるBBCでは、ポピュラー音楽のオンエアーの時間が十分ではなかったことから、自ら船舶をラジオ局にして海賊放送局³⁾を開局する者たちまでも出現した。同じ英語圏で言葉の壁がないこともあり、イギリスの若者にとってアメリカのポピュラー音楽を受け入れるのは容易なことであった。大西洋便でアメリカから届く物資が最初に陸揚げされるという、物理的にもアメリカに最も近い就航地であるリバプール⁴⁾からも、ギターやドラムスを用いてロック・バンドを結成し、アメリカのヒット曲をコピーし、さらにオリジナルの楽曲までも手がけ、地元のライブハウスでの演奏で注目を集める若者たちが登場するのはごく自然ななりゆきであったといえよう。

ザ・ビートルズは、リバプールで一番の人気バンドとなり、ロンドンに出て1962年10月に発売されたシングル「ラブ・ミー・ドゥ (Love Me Do)」が大ヒットとなり、ついに英国のポピュラー音楽界のトップスターの仲間入りを果たした。アメリカにおいても、1963年の年末ごろから、ラジオをきっかけに、彼らの曲はヒットチャートを駆け昇り、ついには世界的な名声を得るまでになり、その音楽が極東に位置する日本にまでたどり着くことになったのである。まさにザ・ビートルズは戦後の新しいポピュラー音楽の潮流を象徴する存在でもあったと言えるだろう。

現時点において、ザ・ビートルズが伝説のロック・バンドであることを疑う余地はないようだ。しかしながら、そんなザ・ビートルズの神格化が進むのは、むしろメンバー同士の確

執が修復できないところまで行き着き、ついに解散に至った1970年代以降である。ザ・ビートルズがロンドンのスタジオでの斬新なミキシング技術への挑戦や既成の音楽との融合など、ライブ活動では実現不可能な音作りに心血を注ぎ、続々と新曲を発表していたのは1960年代に限られており、1970年代以降にメンバーそれぞれが行った活動とは全く別のものである。そのような時代に、リアルタイムでザ・ビートルズの発表する楽曲を心待ちにしていたエンドユーザーでもあるリスナーたちに、ビートルズ音楽はどのように送り届けられていたのだろうか？ 遙か極東に位置する日本の一地方都市の若者向けラジオ番組にまで楽曲を提供していたザ・ビートルズは、日本社会でどのような位置を獲得していたのだろうか？ この疑問が本論の出発点でもある。

本研究の対象を名古屋の中部日本放送局（Chubu-Nippon Broadcasting Co., Ltd：以下「CBC」と略記）に限定したのは、一次資料の入手が可能であったことに加え、CBCが1966年のザ・ビートルズの来日公演とかかわりのある唯一の放送局であることも理由のひとつである。ザ・ビートルズの来日公演に際して、その必要経費を補うために、読売新聞とともに経済的なサポートを行った唯一の放送局がこのCBCであった。1960年代の後半に中部地区の高校生たちに深夜放送のブームを巻き起こしたこの中部日本放送のAMラジオ番組を事例として、日本におけるビートルズ伝説の萌芽期の検証を試みるのが本論の意図するものである。

第1章 深夜放送ブームと中部日本放送

まずは日本における戦後のポピュラー音楽の大まかな流れを概観してみよう。アジア太平洋戦争終了後の占領期以降の日本には、アメリカのジャズ、ハワイアン音楽、カントリー・アンド・ウエスタン、ブルースなど、戦時期には敵国の音楽として禁止されていた英語の音楽が流れ込み若者の心をつかんだ。日本人の中からも、その楽曲のコピーを行う者たちが登場し、日本に駐留している米軍のキャンプのクラブに出向き、アメリカ兵を相手にその演奏活動で生計を立てる若者たちも出現した。彼らはその後の日本のポピュラー音楽の発展に重要な役割を果たすことになる⁵⁾。

また、1960年代の日本では、家電メーカーから発売されていた音楽再生のための装置が各家庭にも普及し、1960年代の地方都市の中流家庭の若者たちにも、それらの機材を用いてポピュラー音楽を楽しむ環境はすでに整えられていた。受験勉強のために個室を与えられ、語学学習のための番組や大学受験講座を聞くという目的のためにトランジスタ・ラジオやそれらを録音するためのカセット・テープ・レコーダーを与えられていた高校生が、「ながら聴取」が可能なラジオの番組に関心を持つようになるのは自然な流れであった。レコードがまだまだ贅沢であった時代にあって、ラジオ放送局へのリクエストは好きな楽曲を楽し

ザ・ビートルズとラジオ深夜放送

む唯一の手段であった。またラジオを通じて音楽を楽しむという娯楽は、それぞれの個室で受験勉強に励む高校生には家族も許容する限られた娯楽の一つでもあり、聴取理由の一番の理由となった。一方、番組の送り手側からみても、高校生が憧れる英語圏から流入する欧米からの音楽は番組の人気を下支えしてくれる頼もしい味方でもあった。

一般家庭にテレビ受像機が浸透した1960年代、娯楽の王座を明け渡すことになったAMラジオ放送局は危機感を募らせていた。テレビに押されて先細りが懸念される中で、新しいリスナーを獲得するという急務への解決策として浮上したのが、夜中まで受験勉強のために起きている受験生のための番組であった。1966年4月に深夜放送番組を始めた大阪の朝日放送に続いて、主要な大都市圏では、続々と深夜放送の番組が登場した。

中部地区では、1967年10月から中部日本放送による「CBCヤングリクエスト」という番組がスタートした。翌年の1968年の5月の番組改編からは、採用されたばかりの男性アナウンサーを抜擢し、若者向きの路線を強化することになった。1968年3月から、ライバル放送局である東海ラジオも「ミッドナイト東海」をスタートさせた。両者ともに高校生からののがきによるリクエスト曲やメッセージを読み上げながら、内外のヒット曲を中心としてDJが楽しい語りかけを行うという番組内容であった。1972年9月にCBCが深夜放送番組の自社製作を断念し、クロスネットとして東京の「オールナイトニッポン」の放送への切り替えを決断するまで、中部地区では、両局の深夜放送番組がライバルとしてしのぎを削っていた。

CBCの深夜放送は、1967年10月から、1972年の9月末まで、番組の名称変更やDJや番組構成の刷新を繰り返しながら、大学卒業後間もない自社の男性アナウンサーやタレント活動を行っている女性のDJたちによる生放送を行った⁶⁾。そのファン・コミュニティは、大学や短大などへの高等教育機関への進学意欲があり、受験勉強の傍ら英語圏から流入するロックやフォークなどのヒット曲に関心を持つ学生たちが中心となっていた。1969年7月13日には知多半島に隣接する三河大島を借り切って、「ビップヤングの会」というファンの集いが行われ、抽選で選ばれた5300人のファンが参加した。ラジオの番組編成の中で、それまでは空白だった夜中の放送時間帯を開拓し、新たなスポンサーを獲得することを意図して深夜放送番組をスタートさせたCBCは、1969年4月からの「オールナイトCBC」という番組によって終夜放送を実現させることになり、これ以降に定着したラジオ終夜放送の先鞭をつけた⁷⁾。

深夜の時間帯の番組名の変遷を見ると、1967年（昭和42年）10月から1970年3月までが「CBCヤングリクエスト」で、1969年（昭和44年）4月からこの番組が二部構成となり、深夜2時から4時50分までは「オールナイトCBC」となる。これが1970年（昭和45年）からは、「CBCビップ&ビップス～ミッドナイト・レインボー」という名称に変わった。この年の初頭にCBC社屋の前の目抜き通り沿いにガラス張りのスタジオが完成し、番組はこ

こから放送されることになった。

このスタジオの完成によって、シャッターを上げれば夜中でも通路から番組を放送する様子を見ることが可能となった。密閉されすべての音を遮断した空間にいるアナウンサーに原稿を読ませるといったスタイルが主流であったそれまでのラジオ放送に対して、ガラス張りのカプセルハウスのようなスタジオが日常的な空間に出現し、車の音や笑い声など生活音もありで、送り手が日常生活の一部であることをうかがわせる放送スタイルや、舗道から通行人たちが機材の操作を行うミキサーが傍らで作業する様子まで観察できるようになったことは画期的なことであった。当時は、全国的にこのようなサテライト・スタジオからの生放送がブームとなっていたという⁸⁾。

1970年5月12日に行われた社報のための座談会では、番組改編後の意気込みを、番組担当者たちが語っている。1969年から「ビップヤングの会」というファンクラブを発足させていたが、この時点で会員数は約5000名を数え、協賛スポンサーは8社となっており、ここからも、深夜放送が若者たちの支持を得ていたことがわかる⁹⁾。中部地方のラジオ放送局において、ブームとなった深夜放送がピークを迎えた時期が、まさにビートルズが楽曲を作り出していた時代と重複するが、座談会に参加しているメンバーは、音楽に限らずリスナーたちの意識の高さを熟知しており、「まだ日本ではヒットしていないような楽曲を航空便で取り寄せたりしている」と述べている。

第2章 ザ・ビートルズと日本人

ここでは、1962年のレコードデビューから今日に至るまでの50年間を四つに区分して、それぞれの時代区分ごとに、ザ・ビートルズと日本のかかわりを詳述する。この50年を、まずリパブルでデビューしてから日本でのレコードデビューまでの【第一期】、レコードデビューから日本への来日を果たして日本のファンへの視覚的なプレゼンスを実現させた【第二期】、ロンドンのアビーロードにあるEMIのスタジオで楽曲作りに専念するものの、アイドルスターを脱した芸術家としての葛藤やメンバー同士の公私にわたる様々な確執のために解散するまでの【第三期】、解散後それぞれが元ビートルズという看板を背負いながらも、ソロ活動を続け、彼らの残した楽曲への社会的な評価が次第に高まり、社会的にも認知され、クラシックとしての楽曲の教養化がすすむ今日に至る【第四期】という大まかな4つの歴史区分ごとに考察を試みる。

【第一期：日本でのレコードデビューまで】

日本においてザ・ビートルズのシングル「抱きしめたい (I Want Hold Your Hand)」が初めてリリースされたのは1964年(昭和39年)の2月であった。このレコードデビューの前に

ザ・ビートルズとラジオ深夜放送

ザ・ビートルズが日本のマス・メディアに登場したのは、ザ・ビートルズが1963年11月4日にロイヤル・ファミリーの前で演奏している様子（ロイヤル・バラエティ・パフォーマンス）を朝日新聞の特派員が伝えたものであったという¹⁰。

1962年10月 シングル「ラブ・ミー・ドゥ（Love Me Do）」で全英デビューを果たしたのは1962年の10月で、1963年1月にはシングル「プリーズ・プリーズ・ミー（Please Please Me）」が大ヒットし、さらに1963年3月にリリースしたアルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』が、5月にはアルバム全英チャート1位に輝き、ザ・ビートルズは、イギリスのトップ・アイドル・グループとなった。

アメリカでのザ・ビートルズをみると、1963年1月にシングル「プリーズ・プリーズ・ミー」でアメリカ・デビューを果たした当時は、注目されなかったものの、1963年の年末頃からラジオがきっかけとなり、その人気はアメリカ国内でも急上昇した。1960年代、1950年代のアメリカン・ポップスを牽引したスターに続くアーティストに欠いていた本家のアメリカの市場に、アメリカのロックやブルースを聞いて育ったイギリスの若者たちがイギリスのヒット曲を掲げて、続々とアメリカのヒットチャートに逆上陸を果たしたが、その頂点にも立っていたザ・ビートルズの渡米は衝撃的な出来事であった。とりわけ、当時最も人気のあった音楽バラエティ番組への出演は、ポピュラー音楽史上特筆すべき出来事であった。1964年2月9日「エド・サリバン・ショー」に出演したザ・ビートルズは、73パーセントの視聴率をたたき出し、これもアメリカにおけるビートルズ伝説の1つとなった¹¹。

【第二期：レコードデビューから来日へ】

ザ・ビートルズの日本公演が正式に発表されたのは4月27日の読売新聞であった。ここに至るまでのポピュラー音楽ファンのための雑誌には、ビートルズ来日が実現するかどうかという記事が、大きな関心事として掲載されて来ている。なかでもその話題が加熱し始めるのが、1966年の初頭である。

例えば『ポップス POPS』1966年2月号では、表紙に「特別企画 ビートルズの来日は可能か！」という記事の見出しが登場し、日本のレコードの発売元である東芝、ザ・ビートルズのこれからのスケジュール、マネージャーのブライアン・エプスタインの動向、日本側の受け入れ態勢の解説に加え、座談会も行われている。また当時の英語圏のポピュラー音楽を愛好するファンたちに最も読まれていた『ミュージック・ライフ』4月号では、電話インタビューによるロンドンの雑誌編集者の証言をもとに、日程はまだ確定していないものの、来日の可能性がかなり高いということを速報で伝えており、この情報がトップ記事として扱われ、表紙を飾るザ・ビートルズの写真の上にその見出しが大きく組まれている¹²。

日本公演の正式発表は、5月3日の読売新聞紙上であり、公演日程、入場料金などが明示されている（図1）。来日は6月29日で、日本武道館での公演は、この社告の後に追加公演

図1 ザ・ビートルズ来日を告げる記事

待望の日程決まる

入場券
(全席指定)

A席 2,100円
B席 1,800円
C席 1,500円

◇入場券の発売方法◇
▽申し込み＝個人名義による
郵便往復はがきで1人1枚に限り受け付ける。復片にあて名を書き往片に郵の履歴(ABCのうち一つ)と住所、氏名を書く。申し込み多数の場合は抽選販売とします。
▽申し込み先＝京浜東北線区内放送新聞社企画部内ザ・ビートルズ係。
▽申し込み期間＝5月5日～10日(当日の消し印有効)
▽抽選と引き替え＝5月中旬ごろ抽選により発送。当選者は5月末(期日は、はがきに明示し、その期間内に引き換えたい場合は無効)①部内の方は部内各論売所(通つて発送)で料金を引き替えに②地方の方は郵送により入手できるように明示します。
▽電話および、直接持参の方は受け付けいたしません。

【来日メンバー】

◇出演者＝ジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スター

◇マネージャー＝ブライアン・エプスタイン

◇音楽、電気、舞台演出など＝ジョージ・ピツクネル、アンソニー・バロン、クエンター・ハンソン、ネイル・アスピナル、マルコム・エバンズ

【プログラム】

①ブリーズ・ブリーズ・ミーの指さしめたい
②ラブ・ミー・ドゥー
③キャント・バイ・ミー・ラブ
④アイ・フィール・フライング
⑤シー・ラブズ・ユー
⑥恋する二人
⑦ローリング・ストーン・ベーターベン
⑧ベイビーズ・イン・ブラツク
⑨オール・マイ・ラビング

ほか
(前日に一軍変更があるかもしれません。ご了承下さい。)

6月30日(ホ) 7月1日(金) 2日(土)
午後6時30分開演

東京都千代田区 日本武道館

東京だけで三回公演






イギリスのポピュラー・グループ「ザ・ビートルズ」の日本公演は次のとおり東京で三回のみと決定しました。全国の多数ファンが申し込みを希望して来りますので、入場券の発売方法に抽選販売といたしました。ご了承下さい。

主催 読売新聞社・提供 中部日本放送

が決まり、計5回となった。この社告の下の方に主催の読売新聞と並び、中部日本放送局の社名が「提供」者として掲載されている。

ビートルズ公演を実現させたプロモーターは協同企画の永島達司氏で、武道館会長でもあった読売新聞の正力松太郎社主が主催をひきうけ、それまでも海外のアーティストの招聘を積極的に行っていたプロモーターとしての先駆者でもある中部日本放送が資金面での協力をするようになった¹³⁾。

東京ではなく名古屋の放送局が経済的なサポートを行ったにも関わらず、ザ・ビートルズは名古屋では公演を行わず、東京の武道館のみで計5回の公演を済ませると、次のコンサートが予定されていたフィリピンのマニラへと旅立っていった。唯一恩恵に被ることができた中部地区のビートルズファンへの特典は、テレビ放送の時間帯が、日曜日の夜の放送ではなく、CBCの視聴者のみ前日の土曜日であったことだけであった。当時の中部日本放送局は地域文化の担い手としてさまざまな文化事業を手がけており、ザ・ビートルズ招聘の協力はゴルフ・トーナメントの主催、独自の劇団や合唱団の運営などの様々な活動の一貫として協力したままで、ザ・ビートルズが後に巨万の富をもたらす金の卵であることに気づくものは、日本全体がそうであったように、CBCの中にもまだ誰もいなかったようである。

この5月3日の正式発表から、日本では、ビートルズ・パッシングが始まった。5月22日に放送されたTBSテレビの「時事放談」という番組の中で、反社会的なザ・ビートルズ

を貴重な外貨を使い、大新聞が伝統文化の武道館を使うことへの批判を行なったのが発端となり、マスコミのバッシングが始まった¹⁴⁾。1984年には、来日当時の喧騒を体験した有識者54人にそれぞれのザ・ビートルズ観をインタビューしたものが一冊の書籍にまとめられているが、この中で、野坂昭如と青島幸夫が、「時事放談」でビートルズ・バッシングの口火を切った小汀利得を囲んで座談会を行っている。冒頭で「小汀さんはビートルズぎらいだそうですが？」という野坂の質問に対して、小汀は以下のように語っている¹⁵⁾：

大きらいだ。だいたいビートルズだのエレキだの、モンキーダンスだのとそこいらで、「ハアア」なんて騒いでいるやつは超特別に軽蔑しているんだよ。だいたい人類進歩のためにならない、人類を墮落させる動きだからね、ああいうのは。

この座談会では、ザ・ビートルズの音楽を「くだらない」、「低級」と言い切り、「青年は静かに本を読むべきである」と主張する小汀氏に対して、野坂氏が低級発言の根拠を問い詰める議論が並行線のまま続けられている。

一方、ここに所収されている萩原の記述からは、ビートルズ来日時の日本のティーン・エージャーたちのポピュラー音楽への思いの変遷を読み取ることができる¹⁶⁾。

1948年生まれの彼が初めて英語の歌と出会ったのは中学生の頃で、ラジオのポピュラー・リクエストの番組に登場したプレスリーやニール・セダカなどの話題が彼の中学校では持ちきりであったという。これらの英語の歌を日本人の歌手が日本語の歌詞でカバーした楽曲も、当時彼の通う中学では流行していたという。

ザ・ビートルズが登場する前に流行したのが、ベンチャーズであった。当時高校生だったこの著者は、ベンチャーズを真似たエレキ・バンドを結成し、彼はドラムスを担当していたという。軽快で弾むリズムがストレートに身体に入ってくる点が新鮮で、ベンチャーズのコピーバンドを囲んだダンスパーティが高校生の間では盛んになり、彼のバンドもパーティの中心であったという。

彼のファン暦は、アメリカのポピュラー音楽、ベンチャーズを経て、ビートルズ・ブームを迎えているが、当時のザ・ビートルズをめぐる世代間対立について、以下のように述べている：

大人たちが、分からない、分からないと騒ぐ度に、自分たちの代弁者が活躍仕出したみたいな気持ちになった。この時ほど、世代間の意識、嗜好の違いが露骨に現れたことはなかったように思う。なにせ、親は歌声がキモチ悪い、と言い、先生は、マッシュルーム・カットを嘲笑し、マスコミも、初めのうちは冷ややかな態度で取り上げていた。

その後、ザ・ビートルズがエリザベス女王から勲章を得たあたりから、彼の周囲の「大人たち」が変わったということを実感したものの、ザ・ビートルズ来日の頃の彼の関心はザ・ビートルズではなく、すでにモダンジャズに移っていたと回想している。

同じ1948年生まれでも高橋三千綱の受け止め方は異なっている。ラジオからザ・ビートルズの音楽は自然に耳に入る環境ではあったが、ベトナム戦争や管理社会と対峙するヒッピーの出現という騒然とした中でラジオから流れる彼らの曲が胸に響いたくらいであるという¹⁷⁾。両者ともに1948年生まれで、ザ・ビートルズ来日時には18歳になっており、彼らの年齢があと5歳若ければ、また異なるザ・ビートルズ観を抱いたかも知れない。

【第三期：アルバム製作から解散へ】

1960年代後半に社会現象にもなった日本の深夜放送ブームは、ザ・ビートルズが楽曲製作を通じて、次々と新境地を開拓していった時期とシンクロナイズしている。1970年12月24日に中部地区初の民間エフエム局である「エフエム愛知」が開局しているが、深夜放送ブームの頃のAMラジオ局の番組には、楽曲の音質や芸術性そのものにこだわる愛好家たちが留まっていた。1960年代の中旬に主要都市で始まった深夜放送番組は、リスナーから送られるはがきに対して、その楽曲をかけながら、台本なしのフリー・トークを行うというそれまでのラジオ放送にはなかったスタイルの番組を、どの放送局でも手探りで作り出していた。やがて、音楽を紹介することに徹するディスク・ジョッキー (DJ) 主流の番組と、それとは対極的に、音楽よりも自由な語りにより意義を見出す番組作りを行うパーソナリティ主導型の番組へと枝分かれしていく。パーソナリティ優先の番組にとって楽曲はもはや主役ではなく、途中で終了させたり、パーソナリティ自らの声をかぶせたりするものまで登場するようになる。東京や関西の大学で大都会の大学生らしいマナーやライフスタイルを身につけ、良質な音楽の選別にこだわる青年たちを核として制作されていたCBCの番組は明らかに前者のタイプであった。

表1は、1970年の時点で、各地方の放送局でも深夜放送番組が誕生し、それぞれの地域で、深夜放送の花形DJが誕生していたことを示すものである。これはキング・レコードから当時のヒットしていた外国の24曲を選んだ企画もののアルバムのプログラムの中に所収されているものであり、この中に、全国の有名DJにアンケート調査を行なった結果が、それぞれの顔写真と一緒に紹介されている¹⁸⁾。

ここに列挙されている者たちは、それぞれの持ち場で、ラジオの新しい番組を模索しながら深夜放送という新しい番組のジャンルを作り上げた人びとであると同時に、流入し続けるおびただしい欧米の楽曲のなかから、それぞれの担当番組で形成しているリスナーとの共同体の中では、どのような音楽が最もふさわしいのかを判断して選び取ることを委ねられたゲートキーパーたちでもあった。

表 1 1970 年における深夜放送担当の DJ たち

氏名	ビートルズ●	放送局名	担当番組名	最終学歴	年齢 (1970年)
白馬康治	△	北海道放送	HBC ヤング 26 時 ヤング・ヤング・フレッシュ	東京私立 4 大	30 代
高野義雄		札幌テレビ放送	夜のディスク・パーティ ゴールデン・ジャズ・コンサート	東京私立 4 大	20 代
高森邦夫	●	青森放送	ビートダイヤル サンデー・サテライト・ショー ナイト・ブリッジ・フォー・ユー	地方国立 4 大	20 代
安田立和	●	東北放送	スタジオ緑屋 7 東北ヒット・パレード	東京私立 4 大	20 代
滝三郎	△	秋田放送	金曜電話リクエスト 夜のローカル・プロムナード	地方国立 4 大	20 代
室井知子	●	栃木放送	夜のリクエスト・アワー	東京私立 4 大	40 代
福田一郎		TBS 北海道放送 FM 東京	バック・イン・ミュージック ロック・アンド・ジャズ ホリデイ・イン・ステレオ	東京私立 4 大	不明
八木誠		TBS ラジオ関東 FM 東京	バック・イン・ミュージック ホリデイ・イン・ポップス プリティッシュ・サウンズ・ナウ ミュージック・スクープ		20 代
北山修		TBS	バック・イン・ミュージック	地方国立医学部	20 代
野沢那智		TBS	バック・イン・ミュージック	大学中退	30 代
白石冬美		TBS	バック・イン・ミュージック	専門学校	不明
土居まさる		文化放送	ハロー・パーティー セイ・ヤング ビャーと集まれ	東京私立 4 大	30 代
桂竜也	●	文化放送	セイ・ヤング	東京私立 4 大	30 代
糸居五郎		ニッポン放送	オールナイト・ニッポン ポップス・ヒット・パレード	専門学校	50 代
斎藤安弘	●	ニッポン放送	オールナイト・ニッポン	東京私立 4 大	30 代
高岡察一郎	△	ニッポン放送	オールナイト・ニッポン	東京私立 4 大	30 代
亀淵昭信	●	ニッポン放送	オールナイト・ニッポン	東京私立 4 大	20 代
長崎節		ラジオ関東	ヒット・ヒット・ランク		30 代
浅木勝		ラジオ関東	オールナイト・パートナー・ リズムミック・ダイヤル	東京私立 4 大	20 代

坂井隆夫		ラジオ関東	オールナイト・パートナー・リズムック・ダイヤル	東京私立4大	30代
久保田泰雄		信越放送	ロッセ・ヤング・テレフォン・リクエスト	不明	30代
広島恵美子	●	信越放送	ドライブ・ミュージック	地方短大	20代
奥脇陽子		山梨放送	パーソナル・ダイヤル山梨	東京私立4大	20代
加藤嘉晴	△	山梨放送	サンデー・ヤング・山梨	東京私立4大	20代
福田政博		北陸放送	ミュージック・コンパ・サンデー・リクエスト	東京私立4大	30代
伊藤貴夫	●	福井放送	FBC ダイヤル	東京私立4大	20代
鈴木昭儀	△	静岡放送	リズム・スタイルブック	東京私立4大	20代
島津靖雄	△	中部日本放送	CBC ヤングリクエスト	東京私立4大	20代
岡本典子		東海ラジオ	ミッドナイト東海	地方私立4大	不明
横堀義郎		岐阜放送	ミュージック・フォー・ユー	地方私立4大	20代
飛鳥井雅和		近畿放送	キング・アワー	地方私立4大	20代
道上洋三		朝日放送	空から今日は	東京私立4大	20代
清水敏夫		山陽放送	トリオ・ミュージック・トレイン	地方私立4大	30代
柏村武昭	△	中国放送	世界のジャンプ・ポップス	東京私立4大	20代
女屋博史		山口放送	ホンダ歌謡ラリー	東京私立4大	20代
鶴木洋	△	四国放送	朝のジョッキー	不明	40代
佐藤祐子	●	四国放送	ミュージック・パートナー	地方私立4大	20代
真鍋京子	●	西日本放送	タマル・ポピュラー・リクエスト	旧制女学校	40代
泉浄彦		南海放送	ミュージック・マラソン	地方私立4大	30代
門田洋子	●	南海放送	夜のバラード	地方私立4大	20代
坂木卓弥	●	高知放送	進たかしのジャンピング	東京私立4大	20代
井上悟	●	RKB 毎日放送	スマッシュ 11, ポップスタイル	地方私立4大	30代
渡久山巖	△	九州毎日放送	キング・ポピュラー・アワー	東京私立4大	30代
川内長治	△	長崎放送	スウィング・ポップス	東京私立4大	30代
林優子	●	熊本放送	ジャンピング・ポップス	地方短大	20代
櫻元洋		宮崎放送	MRT ヤング・ヒット・パレード	地方私立	20代
横山欣司	●	南日本放送	ユア・ヒット・パレード	東京私立4大	30代

●：ビートルズファン △：ジャズファン

出典：『全国有名ディスク・ジョッキーが選んだゴールデン・ヒット・ダブル・デラックス』（キング・レコード, 1970）

そのプロフィールを見ると、女性が僅かであることに気づく。また年齢構成を見ると、平均年齢は30.45歳で、「25歳以下のもの」が17パーセント（8名）、「26歳から30歳」が41.9パーセント（19名）、「31歳以上のもの」は36.1パーセントと20歳代後半から30歳前後の者たちが大多数を占めていることがわかる。

次に最終学歴をみると、東京の大学を卒業したものが57パーセント（27名）とほぼ6割を占めている。このリストのDJたちは、そのほとんどが地方の放送局に所属してその地域限定の番組を担当しているものであるにもかかわらず、東京の大学卒業後に地方都市のアナウンサーになったものが多いことがわかるだろう。地方の4年制大学を卒業しているものは23パーセントで、短大・大学中退・高等専門学校などの卒業者は16パーセント（7名）であり、日本の深夜の時間帯の若者向けの番組の黎明期におけるこれらの番組は、東京の大学出身者の男性アナウンサーたちが中心となって作り出されていたことがわかる。また、東京大学などの大都市の国立大学の出身者が皆無であるというのも興味深いところである。

このアンケートでは、好きなアーティストについても尋ねているが、回答者47名のうち32パーセント（15名）がビートルズを好きなアーティストとして挙げている。それ以外で多かったのは、ジャズやフォークソングで、日本のアーティストの名前を好きだと答えたものは糸居五郎氏の「春日八郎」を例外として皆無であった。デモグラフィーから見て、均質な地方都市のDJたちが、ザ・ビートルズを筆頭に、欧米のポピュラー音楽をまんべんなくラジオ番組の中で紹介することで、その影響を受けた日本の若者たちの中から愛好者が生まれファン層を形成したという推論は容易に成り立つであろう。

【第四期：社会的な認知と教養化】

この期間は解散以降で最も長い期間になるが、ザ・ビートルズの解散以降はメンバーがそれぞれの道を歩むことになる。ザ・ビートルズとしての活動期間に残された楽曲や活動中のエピソードが語り継がれ、その楽曲の普遍性が再評価とともに繰り返され多くのアーティストにカバーされ、その広がりによってザ・ビートルズが教養となっていく。

楽曲提供の核でもあったメンバーの二人であるポール・マッカートニーとジョン・レノン(John Lennon)の関係が修復され、いつかビートルズが再結成される時が巡ってくるかもしれないというファンたちの期待とはうらはらに、1981年にはジョンがニューヨークで狂信的な若者の放った凶弾に倒れた。当時のジョン・レノンは若干40歳であり、長い育児休暇を経て、ソロ活動再開の証でもあるアルバムを掲げてカムバックを果たそうとしていた矢先の悲劇であった。ジョンの不慮の災難で再結成の夢が消え去り、また新しい物語の一ページがビートルズ伝説に加えられた。そして2001年11月29日にはジョージ・ハリソン(George Harrison)が病魔との戦いに負けて帰らぬ人となり、残ったメンバーはポールとリンゴの二人のみとなった。

1980年頃から、日本においてもビートルズの評価が高まり、クラシック音楽のジャンルに加えられるようになると前述したが、それを如実に示しているのが、学校教育の現場におけるビートルズ楽曲の扱いである。学校の音楽の教科書に登場したザ・ビートルズに着目した小泉（1997年）は、ビートルズの楽曲のクラシック音楽との類似性を指摘している。またこれは、ジョン・レノンの楽曲よりもポール・マッカートニーの楽曲の方がより多く採用される理由でもあるとしている。

日本の音楽の教科書に採用された楽曲については、網羅的に概観した表にして、本論に参考資料とし掲載した〔参考資料：「日本の音楽の教科書に採用されたビートルズの楽曲」参照〕。文部科学省の検定制度の下で出版される日本の教科書の中に初めてビートルズが登場したのは1973年、音楽ノ友社発行の『新版高校生の音楽』に掲載された「イエスタデイ (Yesterday)」である¹⁸⁾。1970年代の教科書に登場した他の楽曲は、「ヘイジュード (Hey Jude)」、 「レットイットビー (Let It Be)」、 「ミッシェル (Michelle)」であり、この四曲を掲載している教科書は数えるほどであったが、1980年代、1990年代、2000年代と、年を追うごとに、各教科書会社がビートルズの楽曲を続々と採用するようになった。高校の教科書が中心であるものの、「オブラディオブラダ (OBL-LA-DI, OB-LA-DA)」は、1990年に小学校の教科書（東京書籍『新しい音楽6』）に登場しており、また「イエスタデイ (Yesterday)」¹⁹⁾は1975年から中学の教科書で取り上げられている。

1990年代になると、これら主要な4曲に加えて、他の楽曲の採用も進み、2000年代になってもこの増加傾向は続いている。2011年に教科書に採用されたザ・ビートルズの楽曲は14曲となっており、本研究では除外した解散後のジョン・レノンの「イマジン (Imagine)」なども含めるとザ・ビートルズの楽曲が数多く学校教育の場にも浸透し、教養化が加速されていることがわかる。また、楽曲を採用した教科書名をそれぞれ出版社ごとに追っていくと、同じタイトルの教科書の改訂版においても、継続してビートルズの楽曲が採用されている。同時代のヒット・メーカーであり、1960年代の深夜放送においてもザ・ビートルズと人気を二分していたサイモンとガーファンクルの楽曲も、1974年には音楽の教科書に登場しているものの、「明日に架ける橋」などの4曲に留まっており、ビートルズの楽曲の採用件数には程遠い状況にあることから、ビートルズの浸透力を伺い知ることができるだろう²⁰⁾。1960年代には、若者の学業の妨げになると疎んじられ、来日公演の折には、当時の知識人や文化人からのバッシングを受けたザ・ビートルズの音楽は、ここに来て市民権を得るまでになり、ついには教育システムの中でも最も重要な道具である教科書の中にまで登場し今日に至っている。

図2 CBCレコードコンサートのプログラム



第4章 1969年にオンエアされたビートルズの楽曲

民間放送のパイオニアであるCBCは、早い時期から海外の有名な音楽家を招聘するシステムを作り出し、また定期的な公開録画にはリスナーを無料で招待し、音楽活動にとどまることなく広範にわたって様々なイベントを主催していた。とりわけ、名古屋の人びとに喜ばれていたのは、定期的で開催される「レコードコンサート」であった。1969年5月にCBCの社屋で火災が発生し、設備が壊滅的な被害を受けるまで、このコンサートは続けられた。筆者も当時参加したことがあるが、レコードが高価な時代にあって、人気音楽評論家を招き、楽曲の解説のあとにそのレコードを聴くというコンサートは映画上映会や有名音楽家の演奏の公開録音等と同じくらい、CBCのリスナーの中では人気のあるイベントであった。この

表2 終夜放送開始以降の番組担当 DJ リスト

(1) ヤングリクエスト+オールナイト CBC (1969年4月)

曜日	担当者 (0:20~2:00)	担当者 (2:00~4:50)
火曜日	三久保角男	鈴木美美子 (ベル)
水曜日	村井秀樹	小島加代子 (カヨカヨ)
木曜日	島津靖雄	金山裕子 (オリーブ)
金曜日	荒川戦一	津島美佐子
土曜日	福井豊治	市岡世津子 (いちこ)
日曜日	朝比久雄	横田玲子

出典：島津靖雄氏作成の資料による

催しには、西ドイツからわざわざ購入した高価な劇場用のステレオ・オーディオ装置が設置してある CBC の第1スタジオが使われ、1957年2月9日から月一回のペースで、CBC は長年にわたりリスナーたちに無料で提供した²¹⁾。

図2は、1968年3月22日のコンサートで配布されていたプログラムの表紙である。第287回目であるが、このコンサートの題目の一つに、「ライバル対決」というコーナーが組み込まれ、ここでは、ローリング・ストーンズ (Rolling Stones) の「テルミー (Tell Me)」とザ・ビートルズの「ハロー・グッドバイ (Hello Goodbye)」が選ばれている。当日のプログラムには、来日予定のエドモンド・ロス楽団、期待の新人としてジョー・サイモンやディオヌ・ワーウィック、ポール・モーリア楽団、トリオ・ロス・パンチョスなど、様々なジャンルのアーティスト達の名前が掲載されている。

表2は、1969年4月からの新しい番組編成によってスタートした「ヤングリクエスト」と「オールナイト CBC」の曜日ごとの DJ を表にまとめたものである。ここから、第二部制がスタートすることになり、0時20分からは男性のアナウンサーが担当し、2時から4時50分までは、地元のタレント事務所などを通じて募集した女性たちが担当することになった。0時台のリスナーは高校生が、2時以降は長距離トラック輸送の仕事に従事しているドライバーや、夜中まで起きているリスナーが中心となり、0時台では内外のポピュラー音楽が中心であったのに対して、2時台の番組では、歌謡曲がかなりの比率を占めていた。しかしながら、楽曲選び方針として一致していたのは、リクエストを紹介しながら紹介する楽曲に加え、各 DJ 自らのセンスで楽曲を選ぶことも許容するということであった。

2010年に実施したインタビューにおいて、話題がビートルズの来日のエピソードに及んだおりに、「CBC とザ・ビートルズ来日との関わりを意識したことがあるかどうか」について尋ねたことがあるが、ザ・ビートルズ来日は、当時の DJ たちにはあまり影響を与えてはなかったようである。DJ たちは、「それぞれの好み」という主観的な判断基準に基づいて、ザ・ビートルズの楽曲を選んでいたにすぎなかったということであった。CBC の深夜放送

表3 オンエアされたアーティスト別楽曲名 (1)

アーティスト名	登場回数	曲名
サイモンとガーファンクル	12	コンドルは飛んでゆく (5), いとしのセシリア (2), 明日に架ける橋 (2), 7時のニュース, 聖しこの夜, フランクロイドライトに捧げる歌, 雨に負けぬ花
ザ・ビートルズ	13	レットイットビー, カムトゥギャザー (2) マックスウェルズシルバーハンマー (2) イエスタデイ, ドント・レット・ミー・ダウン オール・トゥギャザー・ナウ サムシング (2: ブッカーTと MGS), レットイットビー (3: アレサフランクリン) ザ・ロング・アンド・ワインディングロード バースデイ
ジリオラ・チンクエッティ (イタリア語)	9	雨 (9)
メアリー・ホブキン	8	ケセラセラ (4), 幸せの扉, 夢見る港, 恋は月をめざして
ボビー・シャーマン	7	ミスターサン, イージーカム・イージー・ゴー, いとしのジュリー, ラララ
クリフ・リチャード	7	幸せの朝, ラメール, ウーララ, 燃ゆる乙女 打ちひしがれて (2), 歓びの人生
ダニエル・ビダル (フランス語)	7	悲しみの兵士 (7)
クリスティー	6	イエローリバー (6)

出典：1969年9月3日から1970年9月23日までの村井秀樹アナのセットアップ・リスト

() 内の数字は複数のオンエア回数を示す

番組スタートの年は、ザ・ビートルズの来日の翌年であったにもかかわらず、ここでの担当者のほとんどが、来日時に担当した部とは関係のないセクションに所属しており、中にはザ・ビートルズ来日後にCBCに入社したDJもいたからであろう。また、ザ・ビートルズ来日が実現したものの、CBCの本拠地名古屋では公演もなく、名古屋市民にとってのビートルズ来日の喧騒は、首都東京での出来事に過ぎなかったことも影響しているのだろう。

表3は、1969年9月3日から1970年9月23日まで(54週分)の、村井秀樹氏の番組の中で放送された楽曲793曲の中から、アーティスト別に頻度の高いものをリストアップしたものである。この番組の時間枠のなかで、最も大きな比率を示したのは、英語のポップ・フォークなどのポピュラー音楽であり、それは全体の38.3パーセントにまでなった。その中でも最も多く登場したアーティストはサイモンとガーファンクルとザ・ビートルズであった。また、シルビー・バルタンやジリオラ・チンクエッティによってフランス語やイタリア語で歌われた当時のヒット曲も上位を占めており、当時の番組には英語圏だけではなく、西ヨー

表4 オンエアされたアーティスト別楽曲名 (2)

日付	楽曲名	アーティスト名
4月6日	スカボロフェア	サイモンとガーファンクル
4月20日	<u>オブラディオブラダ</u>	<u>ビートルズ</u>
5月13日	キャラバン	ベンチャーズ
	<u>ミッシェル</u>	<u>ビートルズ</u>
	シーズアレインボー	ローリングストーンズ
6月1日	I Can Hear Music	ビーチボーイズ
	<u>ゲットバック</u>	<u>ビートルズ</u>
6月15日	<u>ゲットバック</u>	<u>ビートルズ</u>
6月22日	デイドリーム	モンキーズ
	サウンドオブサイレンス	サイモンとガーファンクル
	<u>イエローサブマリン</u>	<u>ビートルズ</u>
6月29日	夢のカリフォルニア	ママスアンドパパス
	<u>イエスタデイ</u>	<u>ビートルズ</u>
7月5日	ハートに火をつけて	ドアーズ
7月13日	フルオンザヒル	セルジオメンドスとブラジル 66
	ジョーク	ビージェズ
7月27日	<u>イエローサブマリン</u>	<u>ビートルズ</u>
8月17日	テルミー	ローリングストーンズ
	<u>愛こそすべて</u>	<u>ビートルズ</u>
8月24日	西暦 2525 年	ゼーガーとエバンズ
	ボクサー	サイモンとガーファンクル
	スマイルフォーミー	ビージェズ
8月31日	ホンキートンクウィメン	ローリングストーンズ
9月1日	<u>ミッシェル</u>	<u>ビートルズ</u>
9月14日	ホンキートンクウィメン	ローリングストーンズ
9月21日	<u>恋におちたら</u>	<u>ビートルズ</u>
	孤独の世界	P.S. スローン
9月28日	<u>パーティはそのままに</u>	<u>ビートルズ</u>

出典：1969年4月6日から9月28日まで。番組担当者のメモより。提供島津氏

ロッパの国々のヒット曲も登場していたことを示している。

表4は、1969年4月6日から9月28日までの期間の日曜日の「オールナイトCBC」の中で取り上げられた楽曲のうち、欧米の音楽のみを取り出したものである。前述のように、歌謡曲が中心となっている番組の中に登場した数少ない英語やヨーロッパの国々の歌を全て網羅したものである。担当DJの横田玲子さんは大のひばりファンで番組においても美空ひばりの楽曲を頻繁に取り上げていたが、ザ・ビートルズの楽曲を中心として、ここに登場する楽曲のほとんどが歌謡曲のファンにとっても受け入れやすいメロディーラインの楽曲で占められていることがわかる。

ザ・ビートルズとラジオ深夜放送

また教科書にいち早く採用された楽曲でもある「ミッシェル」、「イエスタデイ」、「オブラディオブラダ」がこのセットアップ・リストの中にも登場していることは特筆に値するだろう。これはまた日本社会におけるザ・ビートルズの楽曲受容の萌芽を示すものである。高級なクラシック音楽と低俗な歌謡曲という二元論的な評価が中心であった当時の日本人の音楽の文化的土壌に、ザ・ビートルズの楽曲は、受け入れやすい楽曲から次第に浸透し、時間の経過とともに日本社会に受容されていったのではないだろうか？そしてその一端を担ったのが地方都市のラジオ放送局であり、若者向けの番組を担当していたDJたちであった。

おわりに

CBCの深夜放送とザ・ビートルズ招聘に貢献したCBCとのかかわりから、1960年代の日本の音楽シーンを入手可能となった文献や資料及びインタビューで得られた資料をもとに、ザ・ビートルズが日本人に受容されて行った経過の一事例を考察した。

筆者が2009年から取り組んだ中部日本放送の深夜放送の聞き書き調査によって得られた一次資料の中に、当事の深夜放送番組でオンエアされた楽曲のセットアップ・リストが全て網羅されているものがあった。DJの村井秀樹氏が大切に保管してくださり、研究資料として筆者に快くご提供下さったものである。その1年間分の楽曲をジャンルなどのカテゴリーごとに区分・データ化してその結果を検証した。この番組の中で最も頻繁に登場した楽曲のランキングを試みたところ、上位に列挙されたのはザ・ビートルズの楽曲であった。

しかしながら、オンエアされた楽曲のランキングを概観すると、様々な楽曲が当時の番組には登場し、ザ・ビートルズは欧米から流入する雑多な楽曲の一部に過ぎないという位置付けであった。その後、島津靖雄氏からもさらなるセットアップ・リストをご提供いただいた。このような研究経過から、1960年代後半の日本の深夜放送におけるザ・ビートルズの立ち位置の検証を試みながら、この50年間の日本人にとってのザ・ビートルズはどのような意味を持っているのかということを考えるうえで、ビートルズ伝説の萌芽期にあたる深夜放送との関係性から考察を試みたのが本論である²²⁾。

戦後の日本で初めて放送を行なった民間AMラジオ放送局であり、中部地方における文化事業の先駆者でもあった中部日本放送（CBC）株式会社は、伝説のバンドであるザ・ビートルズの招聘に多大な貢献を果たしたにも関わらず、なんら報われないうちに、来日から46年が経過した。来日中のザ・ビートルズのメンバー達の姿を丹念に追った浅井慎平氏の手による写真集が、CBCの手によって日本公演の直後に出版されているものの、それを今でも所有しているごくわずかな者以外、世界中にいるビートルズファンが手に取る可能性は今後も見込めそうもない。

これからの日本で、ザ・ビートルズの楽曲はどのように愛好され、彼らの伝説は語り告が

れていくのだろうか。

注

- 1) "A long and winding road to iTunes," *International Herald Tribune*, November 18, 2010.
- 2) 次の論文では、1955年とされている。Peterson, Richard A. "Why 1955? Explaining the advent of rock music," *Popular Music Vol. 9 No. 1 (January 1990)* pp. 97-116.
- 3) 実在した海賊放送船舶をモデルにした2009年のイギリス・ドイツ映画『パイレーツ・ロック』(The Boat That Rocked: 監督リチャード・カーティス)が参考になる。
- 4) 筆者は2007年にリバプールに出向き、メンバーの足跡や楽曲それぞれにゆかりのある場所を訪ねたが、リバプールという、大航海時代から世界中から物資と情報が集まる港町としての土地柄とビートルズが作り出した音楽の普遍性との関係も注目に値するかもしれない。この点に関しては、福屋利信『ビートルズ都市論』(幻冬舎、2010年)が参考になる。
- 5) 米軍キャンプを経験した日本人と戦後のポピュラー音楽形成については、東谷護『進駐軍クラブから歌謡曲へ—戦後日本ポピュラー音楽の黎明期』(みすず書房、2995年)に詳述されている。
- 6) 長谷川倫子「若者向けラジオ深夜放送番組の生成—1960年代末のCBC(中部日本放送)を事例として—」*コミュニケーション科学* 第34号(2011年10月)3-23頁, HASEGAWA, Tomoko, *Emerging Teenage Midnight Radio Communities in Japan in the Late 1960s—A discussion of DJs and Western popular music aired by Chubu-Nippon Broadcasting Co., Ltd. in Nagoya* (=1960年代末に登場した中部日本放送局の深夜放送番組の研究—ディスクジョッキーと音楽の関係性からの一考察—)*コミュニケーション科学* 第33号, 2011年2月 223-242頁。
- 7) 中部日本放送株式会社『中部日本放送50年のあゆみ』(中部日本放送株式会社, 2000年)150-151頁。
- 8) 放送スタイルの大きな変化については、2010年6月から8月にかけて名古屋にて実施されたインタビューから。出席者は加藤清氏、島津靖雄氏、村井秀樹氏。
- 9) 「深夜放送CBC VIP & VIPS 座談会 深夜放送は今や『全国版』真夜中に虹をかける意気込みを」中部日本放送社報第216号。
- 10) 恩藏茂『ビートルズ日本盤よ、永遠に 1960年代の日本ポップス文化とビートルズ』(平凡社, 2003年)27-28頁。
- 11) 恩藏茂(2003年)32頁。この番組からは、ビートルズが演奏していた10分間はニューヨークで青少年の犯罪が一件も発生しなかったというエピソードが生まれたとされている。
- 12) 「ビートルズの来日は可能か!」『ポップスPOPS』1966年2月号, pp. 20-27頁, ビートルズが8月に来日する』『ミュージック・ライフ』1966年4月号, pp. 56-59頁。
- 13) 柴田勝章『戦後ポピュラー日誌』(八曜社, 1982年)pp. 19-26頁。中部日本放送株式会社『中部日本放送50年のあゆみ』(中部日本放送株式会社, 2000年)135頁。
- 14) 恩藏茂『ビートルズ日本版よ、永遠に 60年代の日本ポップス文化とビートルズ』(平凡社, 2003年)pp. 138-155頁に詳述されている。
- 15) 村上龍他著/香月利一編『ビートルズってなんだ? 53人の“マイ・ビートルズ”』(講談社, 1984年)79-90頁。[「宝石」1966年8月号からの転載]
- 16) 萩原朔美「ベンチャーズからビートルズへ」村上龍他著/香月利一編『ビートルズってなん

ザ・ビートルズとラジオ深夜放送

だ？ 53人の“マイ・ビートルズ”』（講談社、1984年）253-256頁。

ベンチャーズが日本に及ぼした影響については、以下の論文が参考になる。

FURMANOVSKY, Michael, “Outselling the Beatles: Assessing the Influence and Legacy of the Ventures on Japanese Musicians and Popular Music in the 1960s,” 2010年3月10日 国際文化研究（龍谷大学国際文化学会）14, pp. 51-64.

- 17) 平凡社『別冊太陽 Get Back! 60's [ビートルズとわれらの時代] 60年代って、なんだったのかな。』1982年10月12日, 133頁。
- 18) 『全国有名ディスク・ジョッキーが選んだゴールデン・ヒット・ダブル・デラックス』（キング・レコード, 1970）アルバムジャケット所収, SLI143-4。
- 19) 1965年8月6日発売のアルバム『4人はアイドル』に収録されている。世界で最も他の音楽家にカバーされている曲の一つとされている。
- 20) 日外アソシエーツ『音楽教科書掲載作品 10000 歌い継がれる名曲案内』（日外アソシエーツ, 2010年）293頁。
- 21) 中部日本放送株式会社『中部日本放送 50年のあゆみ』（中部日本放送株式会社, 2000年）76-77頁。
- 22) ザ・ビートルズがデビューして、今年が50年目の節目を迎えた。筆者も自宅の勉強部屋にトランジスタラジオを持ち込み、深夜放送を聞きながら、リクエスト・カードを送ったひとりであり、長い歳月を経て、再びDJの方々に会えることが叶った。そのCBCの番組の中でご紹介くださった、ザ・ビートルズの「And I Love Her」, 「Yesterday」, 「Penny Lane」はいまでも好きな楽曲である。当時のファンコミュニティのメンバーとして、この研究は自らのアイデンティティの再確認の作業となった。

参考文献

- 伊奈正人「団塊若者文化とサブカルチャー概念の再検討—若者文化の抽出/融解説を手がりとし
て—」東京女子大学社会学会紀要第32号, 2004年3月12日, pp. 1-23
- 恩蔵茂『ビートルズ日本盤よ、永遠に 1960年代の日本ポップス文化とビートルズ』（平凡社,
2003年）
- 片岡利一編・著／藤本国彦監修・改訂・増補『ビートルズ事典』（ヤマハミュージック・メディア,
2010年）
- きたやまおさむ『ビートルズ』（講談社, 1987年）
- 小泉恭子「ビートルズ教育学」『芸術と教育』（兵庫大学芸術系教育講座, 1997年）1, 114-135頁。
- ジョン・レノン／片岡義男訳『ビートルズ革命』（草思社, 1972年）
- 中部日本放送株式会社『中部日本放送 50年のあゆみ』（中部日本放送株式会社, 2000年）
- 日外アソシエーツ『歌い継がれる名曲案内：音楽教科書掲載作品 10000』（日外アソシエーツ,
2011年）
- 長谷川倫子「若者向けラジオ深夜放送番組の生成—1960年代末のCBC（中部日本放送）を事例と
して—」コミュニケーション科学 第34号（2011年10月）3-23頁
- HASEGAWA, Tomoko, *Emerging Teenage Midnight Radio Communities in Japan in the Late 1960s—A
discussion of DJs and Western popular music aired by Chubu-Nippon Broadcasting Co., Ltd. in Na-*

goya (= 1960年代末に登場した中部日本放送局の深夜放送番組の研究—ディクジョッキーと音楽の関係性からの一考察—) コミュニケーション科学 第33号, 2011年2月 223-242頁
平凡社『別冊太陽 Get Back! 60's [ビートルズとわれらの時代] 60年代って、なんだったのかな。』

1982年10月12日

ミュージックライフ編『ビートルズの軌跡』(シンコーミュージック, 1972年)

村上龍他著/香月利一編『ビートルズってなんだ? 53人の“マイ・ビートルズ”』(講談社, 1984年)

和久井光司『ビートルズ 20世紀文化としてのロック』(講談社, 2000年)

FURMANOVSKY, Michael, “Outselling the Beatles: Assessing the Influence and Legacy of the Ventures on Japanese Musicians and Popular Music in the 1960s,” 2010年3月10日 国際文化研究(龍谷大学国際文化学会) 14, pp. 51-64.

謝辞:

本論文のためのインタビューは2010年6月から8月にかけて名古屋にて実施された。調査協力者は以下の皆様である。この場を借りて本研究への多大なるご協力へ、心からの謝意を表したい。またこの調査時に、筆者が楽しみにしていた、「オールナイトCBC」の日曜日をご担当だった横田玲子さんがすでに故人となられていることも教えていただきました。ここに謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。

島津靖雄氏 (1968年5月~1972年9月, DJ)

村井秀樹氏 (1968年5月~1971年3月, DJ)

加藤清氏 (1968年~1969年, 曜日ディレクター)

金山裕子氏 (1969年4月~1971年3月, DJ)

後藤克幸氏 (元CBC広報課)

参考資料 日本の音楽の教科書に採用されたビートルズの楽曲

楽曲名	1970年代	1980年代	1990年代	2000年以降
イエスタデイ (Yesterday)	中学校 1975年「中学生の音楽」(教育芸術社) 1975年「精選中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 高校 1976年「高校生の音楽1」(教育芸術社) 1975年「音楽3」(教育出版) 1972年「新版高校生の音楽」(音楽之友社) 1976年「改訂新版高校生の音楽1」(音楽之友社)	中学校 1981年「中学生の音楽」(教育芸術社) 1984年「中学生の器楽」(教育芸術社) 1987年「中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 高校 1985年「高校音楽1」(教育芸術社) 1985年「高校音楽1」(教育芸術社) 1988年「最新音楽1」(教育出版) 1983年「精選高校生の音楽2」(音楽之友社) 1986年「改訂高校生の音楽2」(音楽之友社) 1989年「高校の音楽2」(音楽之友社) 1989年「高校生の音楽2」(音楽之友社)	中学校 1980年「改訂中学生の音楽」(教育芸術社) 1983年「中学生の器楽」(教育芸術社) 1987年「中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 1980年「改訂中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 1983年「新編中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 高校 1991年「改訂高校音楽1」(教育芸術社) 1994年「高校生の音楽1」(教育芸術社) 1988年「高校生の音楽1」(教育芸術社) 1991年「最新音楽1改訂版」(教育出版) 1988年「高校音楽1改訂版」(教育出版) 1991年「改訂高校の音楽1」(音楽之友社) 1991年「改訂高校生の音楽1」(音楽之友社) 1994年「新編高校の音楽1」(音楽之友社) 1994年「新編高校生の音楽1」(音楽之友社) 1985年「最新高校生の音楽2」(音楽之友社) 1988年「最新高校の音楽1」(音楽之友社) 1989年「最新高校生の音楽2」(音楽之友社)	中学校 2006年「中学生の音楽」(教育芸術社) 高校 2003年「高校生の音楽1」(教育芸術社) 2007年「高校生の音楽1」(教育芸術社) 2003年「高校音楽1 MUSIC ATLAS」(教育出版) 2007年「高校音楽1改訂版 MUSIC ATLAS」(教育出版) 2003年「新高校生の音楽1」(音楽之友社) 2003年「新高校の音楽1」(音楽之友社) 2007年「改訂新版高校生の音楽1」(音楽之友社) 2007年「改訂新版高校の音楽1」(音楽之友社)
オブライディオブラダ (OBL-LA-DI, OB-LA-DA)	小学校 1980年「新しい音楽6」(東京書籍) 1985年「新編新しい音楽6」(東京書籍) 中学校 1987年「新訂中学生の器楽1～3」(音楽之友社)	小学校 1980年「新編新しい音楽6」(東京書籍) 1985年「新編新しい音楽6」(東京書籍) 中学校 1980年「改訂中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 1983年「新編中学生の器楽1～3」(音楽之友社)	小学校 1986年「新編新しい音楽6」(東京書籍) 中学校 1980年「改訂中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 1983年「新編中学生の器楽1～3」(音楽之友社) 高校 1984年「高校音楽1」(教育出版)	小学校 2000年「新訂新しい音楽6」(東京書籍) 2002年「新しい音楽5」(東京書籍) 高校 2003年「音楽1 Tutti」(教育出版) 2007年「音楽1改訂版 Tutti」(教育出版) 高校 2007年「高校生の音楽1」(教育芸術社)
ノルウェーの森 (Norwegian Wood)			中学校 1987年「新訂中学生の器楽」(教育出版) 高校 1984年「高校用音楽3」(教育芸術社) 1987年「高校用音楽3」(教育芸術社) 1989年「高校音楽2」(教育芸術社)	中学校 2002年「中学生の音楽2・3下」(教育芸術社) 2006年「中学生の音楽2・3下」(教育芸術社) 2002年「中学器楽 音楽のおくりもの」(教育出版) 高校 2004年「高校音楽2 MUSIC ATLAS」(教育出版) 2008年「高校音楽2改訂版 MUSIC ATLAS」(教育出版) 2000年「最新高校の音楽3」(音楽之友社)
ヘイジュード			中学校 1983年「中学生の音楽2・3下」(教育芸術社) 1997年「中学生の音楽2・3下」(教育芸術社) 1980年「改訂中学生の器楽」(教育出版) 1983年「新版中学器楽」(教育出版) 1987年「中学器楽」(教育出版) 高校 1989年「高校音楽2改訂版」(教育出版) 1982年「改訂高校の音楽2」(音楽之友社)	中学校 2002年「中学生の音楽2・3下」(教育芸術社) 2006年「中学生の音楽2・3下」(教育芸術社) 2002年「中学器楽 音楽のおくりもの」(教育出版) 高校 2004年「高校音楽2 MUSIC ATLAS」(教育出版) 2008年「高校音楽2改訂版 MUSIC ATLAS」(教育出版) 2000年「最新高校の音楽3」(音楽之友社)

All Together Now				中学 1983年「中学生の音楽1」(教育芸術社)	
And I love Her			高校 1986年「高校生のための音楽3」(教育芸術社)	高校 2000年「高校生の音楽3」(教育芸術社)	
Here There and Everywhere			高校 1982年「改訂高校生の音楽2」(教育芸術社)		
Lady Madonna				高校 2004年「Mousa 2」(教育芸術社)	
Let it be	高校 1977年「高校用音楽2」(教育芸術社)	高校 1984年「高校用音楽3」(教育芸術社) 1987年「高校音楽3」(教育芸術社) 1989年「高校音楽2」(教育芸術社)	高校 1992年「改訂高校音楽2」(教育芸術社) 1995年「高校生の音楽2」(教育芸術社) 1996年「高校生のための音楽3」(教育芸術社) 1999年「高校生の音楽2」(教育芸術社) 1999年「音楽2」(教育出版) 1999年「音楽2改訂版」(教育出版)	高校 2007年「高校生の音楽1」(教育芸術社)	
Michelle	高校 1977年「改訂新編高校生の音楽2」(音楽之友社)		高校 1980年「高校の音楽3」(音楽之友社) 1982年「改訂高校生の音楽2」(音楽之友社) 1983年「改訂高校の音楽3」(音楽之友社) 1985年「新編高校生の音楽2」(音楽之友社) 1989年「最新高校生の音楽2」(音楽之友社)	2004年「音楽2 Tutti」(教育出版) 2008年「音楽2改訂版 Tutti」(教育出版) 2008年「改訂新編高校生の音楽2」(音楽之友社)	
Nowhere Man			高校 1984年「音楽1」(教育出版)		
Please Please Me			高校 1986年「新編高校の音楽3」(音楽之友社)		
The Fool On The Hill			高校 1988年「Mousa 1」(教育芸術社)	高校 2007年「Mousa 1」(教育芸術社)	
The Long and Winding Road			高校 1982年「改訂高校音楽2」(教育芸術社)	高校 2003年「Mousa 1」(教育芸術社)	

出典：日外アソシエーツ『音楽教科書掲載作品 10000 歌い継がれる名曲案内』(日外アソシエーツ、2010年)
 1949年～2009年発行の小・中・高校の音楽教科書 1,354冊に掲載された作品約10,000作品の中から抜粋
 (ジョン・レノン：834～835頁、ポール・マッカートニー：697～698頁 ビートルズ時代の楽曲のみ)